

INTERVIEW

社会医療法人哲西会 哲西町診療所
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科
地域医療人材育成講座 教授
佐藤 勝先生



地域医療の魅力

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

請われて新天地へ

山田隆司(聞き手) 今日^{てっせい}は岡山県新見市の哲西町診療所に佐藤 勝先生を訪ねました。

まずは先生が卒業してから、哲西町にいられた経緯を紹介していただけませんか。

佐藤 勝 私は島根県の出身で、自治医科大学11期卒業です。島根県立中央病院で初期研修を2年間行った後、隠岐の島の島後にある島後組合立隠岐病院(現 隠岐広域連立隠岐病院)の内科で2年間、それからそこから20キロくらい離れた都万村国民健康保険診療所(現 隠岐の島町国民健康保険都万診療所)に3年間行きました。そこは人口2千人くらいで医者は1人だったのですが、外来患者が1日平均90人受診し午前の外来が毎日2～3時に終わるといような感じで、島根

県で一番忙しい診療所と言われていました。

山田 1日90人というのは大変ですね。

佐藤 はい、とても大変で医者を2人にしてほしいと言っていたのですが……。

そこにいるときに特別養護老人ホームを作ろうという話がありましたので、作るのなら自分が本当に住みたいホームを作ろうと提案をしました。町のど真ん中を作って、役場の隣りに包括ケアに関わるすべての機能を集めて、老人が町の真ん中に住めるような老人ホームです。そういう計画を立て、これから実現しようと動き始める頃、異動があり義務年限9年間の最後の2年間は本土に帰って、島根県立中央病院と浜田市にあった島根県成人病予防センターで内

視鏡をする毎日で、義務年限を終えました。

義務年限が終わるときに、「都万村が医者をして2人にするから戻ってきてほしいと言っている。県からも2人派遣することにするので、10年目にまた都万村診療所に行ってきてくれ」と当時の県立中央病院の院長に言われ、また都万村に戻ることにしました。

山田 義務年限が終わって都万村にもう一度行ったわけですね。今度は2人の医師の1人として。

佐藤 そうです。3年目の医師と10年目の私の2人体制でした。

山田 都万村に帰って来てほしいと要請されたわけですね。

佐藤 はい。自分が2年前と一緒に計画していた施設ができるというので、ものすごく意気を感じました。その時には内視鏡をやりたいとか、行きたい病院もあったのですが、こんなふうに招いてくれるところは、もしかしたら一生ないかもしれないと思い決めました。

山田 再度都万村に赴任して何年務めたのですか。

佐藤 4年です。2年の約束で行ったのですが、やはりソフト事業をしっかりと進めるにはそのくらい時間がかかりました。絵に描いた餅ができ、ハードはできたのに、それに見合ったソフト事業ができないと意味がないと考え、しっかりと魂を注ぎ込みました。でも自分が長くいられないのなら(自分が生涯ここでやっていけないのなら)、早く後輩に渡して、後輩にもこういう地域医療を経験してもらえれば、もっと地域医療の

同志が増えると思ったから、早く退かなければとも思っていました。

都万村を退こうというときに、ここ哲西町の当時の町長さんが、町に地域包括ケアの施設を建てたいと言って、私のところに相談にいらしたのです。都万村で保健・医療・福祉の一体化を実現したら人口も増えたという私の記事を読んだということでした。私は当時、保健・医療・福祉だけではなく、定住対策や産業、教育、文化も一緒に考える町づくりにも関心を持つようになっており、もしかしたら哲西町の将来は自分にとっても理想かもしれないと考えました。当時の島根県知事さんから「どうして辞めるのか」と直筆の手紙をもらったりもしましたが、「5年間行ってきます」とここに赴任しました。5年後には島根県から迎えにも来ていただきましたが、もうここから逃げられない状況で、今に至っています。

山田 都万村での実績を島根県知事にも認められ、そのことが哲西町の当時の町長さんが知るきっかけになったということですね。その町長さんとは最初にどこで会われたのですか。

佐藤 松江まで来られてお会いしました。

山田 それだけ熱意があったわけですね。先生はそのときに初めて哲西町のプランを知ったのですか。

佐藤 電話では少し聞いていましたが、お会いして熱心に夢を語られて、自分にとっても想いを具現化する形かなと思いました。

医療を核としたまちづくり

山田 先生は最終的にどうしてここに来ようと決心したのですか。

佐藤 夢というか……保健・医療・福祉を充実させた

ら人口が増えて、産業構造も変わった。第三次産業をする人が増えて人口まで増えた。「地域包括ケアによって産業、教育、文化も変えた」とい